続々・白糠のアイヌ語地名

庶路川筋のアイヌ語地名

第３回

○チノミ

「チノミ」は、「チ（我ら、私たち）・ノミ（祭る、祈る）」という意味で「祭場」のことを表し、庶路共同墓地周辺から北側の原野を指します。

明治時代のアイヌ研究者永田方正は、『北海道蝦夷語地名解』（永田地名解）で「チノミ　祭場　熊ヲ供へ神ヲ祭ル處」と、ここでイヨマンテ（クマの霊送り）が行われたことを記しています。

また、チャシ跡と集落跡を示す壕や竪穴住居跡が確認されていて、エムシ（刀）とエムシアツ（刀吊り）が見つかっています。

■熊ヲ供へ神ヲ祭ル處

イヨマンテは、「動物の魂をカムイモシリ（神の世界）へ送る」という意味ですが、一般的には「クマの霊送り」として知られています。

クマは神が姿を変えて毛皮と肉を土産に人間世界を訪れたもので、クマを射止めたときは、儀礼をして神の世界に送り帰しますが、子グマは生け捕りにし、1年から2年育てた後、送別の宴を開き、たくさんの土産を持たせて親の神へ送り帰します。こうすることで、人間世界がいいところであることを神々に伝え、再び人間世界を訪れてもらうことを願いました。

このように、アイヌの人たちは、イヨマンテを村をあげて行い、獲物を安定して獲ることができるよう祈願しました。

また、日常使っている器具や道具、祭具なども、神々が化身して人間世界で役立っていると考え、それらが古くなったり破損して使えなくなると、イヨマンテと同じように霊送りの儀礼をして、送り場と呼ぶ場所に運びました。

これらのことから、「チノミ」は、『永田地名解』の記載や遺跡から見つかったエムシとエムシアツによって、コタン共同の「祭場」として特別で重要な場所であったことがわかります。

【参考／『アイヌの歴史と文化Ⅱ』アイヌの送り儀礼（秋野茂樹）、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構ホームページ『アイヌ生活文化再現マニュアル』イオマンテ】

エムシ（左）とエムシアツ（右）

○トーパラペツ（泊別）

「トーパラペツ」は、泊別川のことで「ト（沼）・パラ（広い）・ペツ（川）」という意味があり、沼のように広い川が流れていたところからこの名がついたと考えられています。

白糠地名研究会は、「トーパラ」の解釈について、「町営牧場がある泊別一帯は、もともとひどい湿地であった」「古老の話によるとむかし川ぶちには木が茂り、かなり水量があった」ということから「沼のように広い」と訳しています。また、『永田地名解』には「廣川」とのみ記載されています。

○エルモクンナイ

「エルモクンナイ」は、泊別川の少し北で西側から庶路川に注いでいる川です。「エルム（ネズミ）・クンネ（黒い）・ナイ（沢）」という意味から「ネズミがいっぱいいた沢」と訳されますが、実際にネズミが多かったかはわかりません。

アイヌ語地名研究者の山田秀三は、「襟裳（岬）」について「エンルム（岬）と呼ばれた音から出たもののようである」としたうえで、「エルム（鼠）と音が近いので、諸地のエンルムは鼠とも理解され、鼠伝説が残されている処が多い。今でも（襟裳）岬の先の海中の岩をネズミになぞらえている」と述べています。

【参考／『北海道の地名』（山田秀三）、『萱野茂のアイヌ語辞典』（萱野茂）